第三次花熟里遺跡調査概報

出口　浩
池畑耕一

1 はじめに

花熟里遺跡は日置郡吹上町中原部落にある弥生後期の遺跡である。調査のきっかけとなった炭火米の発見，底部の広い袋状の竪穴，鉄斧の発見，溝状遺構，住居址など弥生後期の集落遺跡として重要である。詳細は鹿児島考古5号 1971　鹿児島県考古学会　第一次花熟里遺跡調査報を参照されたい。

この遺跡は河口貞徳氏の指導のもとに第1次調査（図の1）昭和43年8月，第2次調査(2)同年12月　第3次調査(3)　昭和45年3月と3回実施した。第2次，第3次は地主池畑国男氏の協力に得るところが大きい。

第1次調査は調査報告でも述べたように，鉄斧1，弥生後期土器片多量，住居址2，溝状遺構などを確認した。第2次調査は住居址1と後期土器，第3次調査は溝状遺構とその中に集積する多量の土器群を発見した。第2次，第3次分は現在資料の整理中である。

第3次調査は溝状遺構を中心として遺構関係を池畑，土器を中心とする遺物関係を出口が分担執筆することになっていたが，池畑の方が早くまとまったので，ひと足先に載せることにした。いずれ本報告を出す予定であるので概報として御了承願いたい。

2 トレンチ設定

まず道路（国道270号線）と並行に幅1*m*のAトレンチ・Bトレンチを設定した。Aトレンチ とBトレンチは国道の退避所のため同じ向きにならなかった。Aトレンチは2*m*ずつに区切り，北側より1区・2区・・・・・12区としたが9区・10区は東へ2*m*延ばしたため3*m*×2*m*となった。また11区・12区は10区の南東端と12区の南東端を結んだため台形様の形をしている。BトレンチはAトレンチ12区に接し，北側より1区・2区・・・・・6区（各区2*m*ずつ）とした。Bトレンチに溝状遺構が見つかったので，この続き具合を調べるために北側にある農道と並行な幅1*m*のCトレンチを設定した。2*m*ずつに区切り，西側より1区・2区・・・・・10区とした。さらにCトレンチより2*m*南側にCトレンチと並行な幅1*m*のDトレンチを設定し，西側より1区・2区・・・・・5区とした。4区・5区はCトレンチ4区・5区と結んだため3*m*×2*m*となり，他は1*m*×2*m*である。BトレンチとDトレンチを結ぶ幅2*m*のEトレンチを設定し，Dトレンチのほうから1区・2区・3区とした。1区は2*m*×3*m*，2区は2*m*×2*m*，3区は台形様である。Aトレンチの溝状遺構追求のためにEトレンチ2区の東側に幅2*m*のFトレンチを設定，2*m*ずつ区切り西側より1区・2区・・・・・5区

とした。1区および2区の西側1mは南側に1m拡張した。Eトレンチ1区・2区境界点とAトレンチ9区・10区境界点を結んだ不規則なグリッドを設定し，これをGトレンチとする。Fトレンチの北側へ平行にHトレンチを設定した。1区〜3区は2m×2m，4区は2m×3m，5区は2m×4m，6区〜9区は次々北側に1mずらして6区・7区は2m×4m，8区・9区は2m×3mである。

トレンチが整然とならなかったのは畑が不整形だったことと，遺構に沿って掘ったためである。

3 層　　序

層序は第1次調査・第2次調査とほぼ同じで表土層（黒褐色砂質土）・第2層（黒色砂質土）・第3層（黄褐色砂質土）となる。遺構の場合は2層が3層に落ち込み，あちこちに数多くみられるイモ穴は1層が2層および3層を切り込んでいる。ただ遺構のみられなかったCトレンチでは2層がなく，1層の黒褐色砂質土のすぐ下に3層があらわれた。さらにFトレンチ4区・5区でも同様な状態をみることができたが遺構は黒色砂質土が3層に落ちこんでいる。土壌が火山灰土であることより火山灰堆積時の凹凸で，このような状態があらわれたものと思われる。

Cトレンチ4区を掘りさげて4層以下の地層および遺物の出土状況を確かめた。第4層は茶褐色の粘質土で，下部になるとパミス混ざりとなる。第4層には遺構・遺物とも見当たらない。これは第1次調査の時にも確認されており，花熟里遺跡の，つまり弥生時代後期の生活基盤面は3層であって，はじめて人が住みついたのも3層堆積後と考えられる。さらに5層には県下各地にみられるシラス土壌がみられた。

4 遺　　構

① 溝状遺構

南北方向および東西方向に延びる2本の溝状遺構がある。説明の都合上，南北方向の溝状遺構をA溝状遺構，東西方向の溝状遺構をB溝状遺構とする。

A溝状遺構はBトレンチ1区からEトレンチ3区・2区・1区を経てDトレンチ3区・4区へと続いている。イモ穴が各所で遺構を掘り込んでいるために，遺構の全容は確認できない。特にDトレンチ4区・5区の附近は溝末端にあたる部分であるが，イモ穴が掘られていたために端を確認できなかった。しかしながらDトレンチ4区の途中までは遺構が続いているが，イモ穴のおわっているDトレンチ5区の南半分では黒色土がなく3層の黄褐色土の出ていることから考えると，遺構はこのイモ穴のどこかでおわっているものと思われる。したがってA溝状遺構はBトレンチ1区からEトレンチ3区・2区とほぼ北向きに流れ，Eトレンチ1区・Dトレンチ3区・4区のあたりで向きを東へ変え，Dトレンチ4区・5区もしくはCトレンチ5区のあたりで切れているものと考えられる。調査地での長さ約10㎝，幅約1m，深さはBトレンチ1区のあたりで少し深かったが約20㎝でほぼU字型の溝である。

B溝状遺構はAトレンチ9区・10区・11区から北東向きにGトレンチ，Eトレンチ3区，Fトレンチ1区・2区・3区・4区，Hトレンチ1区・2区・3区・4区・5区・6区と流れ，7区・8区のあたりでいくらか東に向きを変えて農道つまり台地の末端に沿って続く。南西部分は国道で切断されており，片方の端は8区でまだ続いているが調査期間の都合で確認できなかった。Hトレンチ8区の北側はすぐ土手になっているが，この溝状遺構の状況（土手にぶつかるあたりで向きを変え，土手に沿っている状況）からみれば当時も今と同じような地勢にあったようである。調査地での長さ約28ｍ，幅は部分的に幾分か差があるが2ｍ前後である。A溝状遺構が全面だいたい同じような深さであるのに対して，こちらは東へゆくにつれ次第に深くなっている。西のAトレンチ9区では殆んど掘り込みがみられないほどであり，10区で約10㎝，Hトレンチ4区で約20㎝，Hトレンチ8区で約30㎝と深くなっている。溝の傾斜面はゆるやかで，ゆるいU字型の溝である。遺物は全面に数多く集積しているが，あちこちで特に集中している個所がみられる。こういった地点はやはり，なんらかの遺構が近くにあったものと思われる。層序をみると腐植土が数層にわたってみられこの溝が相当の期間にわたって使用されたことをうかがえる。

2本の溝状遺構はEトレンチ3区で交叉している。ここではA溝状遺構が約5㎝深くなっており，上部ではB溝状遺構しか確認できなかったものがB溝状遺構の床面まで掘りさげていくとA溝状遺構の端が現われること，さらにA溝状遺構で遺物は少ないのに対し，B溝状遺構では多量の遺物を出土しているが，Eトレンチ3区でも遺構に沿って遺物が多量に包含されていることより推定するとA溝状遺構が古い。したがってA溝状遺構がいちど地表面まで埋まったあと，新しい集落境界としてのB溝状遺構が掘られたものと思われる。

②　ピット

Aトレンチ10区・11区，Bトレンチ1区の溝状遺構周辺から15個のピットがみつかった。径は小さいもので約10㎝，大きいもので約30㎝と一定しない。

これらは整然としているわけでなく溝内あるいは溝の脇または溝の傾斜面とあらゆる場所にみつかっている。その一部は溝の脇に並んでいるが，Fトレンチになるとピットはない。溝内にあった大きなピットの底からは土器の割合大きい破片が出土した。

その性格は溝状遺構の性格がわからないことには，はっきりしないが，溝と関連あるクイ跡ではなかろうか。

5 考　　察

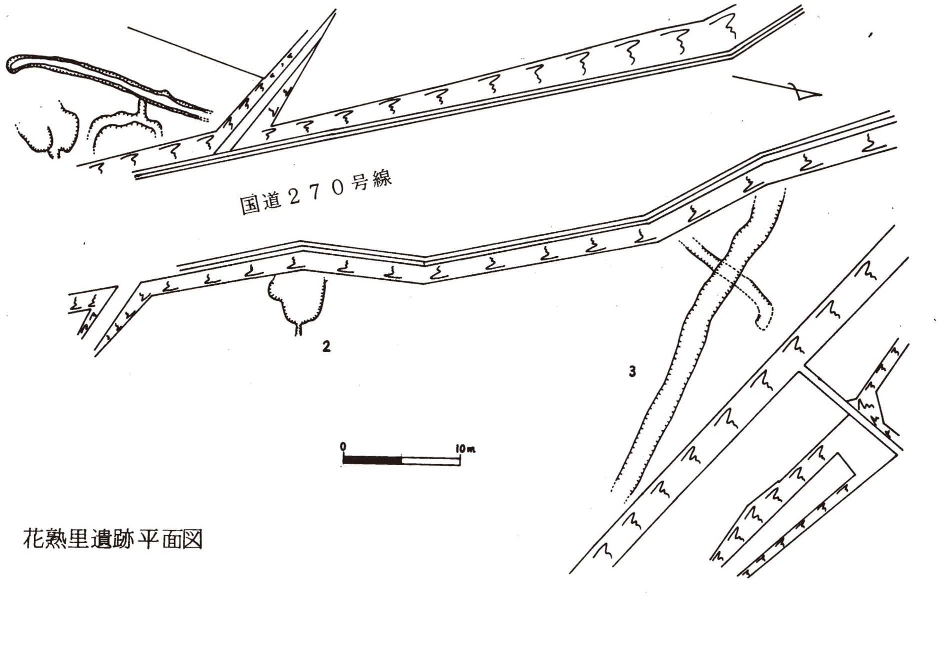
これらの溝状遺構がどの住居址を囲んでいたものか，また何軒位の家屋を囲んでいたものかはまだ発掘が一部分しか行なわれていない上に，国道でだいぶ切断されているために推定すらできない。しかしながら，この2本の溝状遺構とも第2次発掘調査時に確認された住居址を囲んでいることは確かである。ただ，この住居址がどちらに属するものかは遺物の検討に依らねばならないが，時期差としてとらえられるか問題である。

次に，これら２本の溝状遺構と第１次調査の時確認された溝状遺構（以下Ａ′溝状遺構と称す）との関係はどのようであろうか。途中を国道で切断されているため推定でしかできないがＡ溝状遺構とＡ′溝状遺構はその方向および形態・規模などから考えると同一の可能性が大である。同一のものとして，この溝状遺構は全長約７０ｍをはかることになる。そして形態は横に長い凹型，つまり両端が彎曲している。溝は台地を南北に走り，東側と西側とに分断している。この区域分断は表面観察によれば，土器片の多くみられる東側と少ない西側との境界にほぼ一致している。また，両端の突出は遺物の多い，いうなれば住居址群の予想される東側を向いている。

溝状遺構の性格については第１次調査概報によりふれたが，もういちど，追加して言及してみたい。Ａ溝状遺構がもしＡ′溝状遺構と同一のものとすれば，この溝状遺構は環濠の意味をもつ比恵型とは違うし，台地全体を巡っている沼型とも違う別型の溝状遺構となる。

当遺跡の場合，以上述べてきた所見からしてその機能はおのずと限定されてくる。まず，両端がとじられていることより排水溝となりえないし，灌漑用水路ともなりえない。次に北端は台地の末端に近いが南端は台地中央附近でとまっていること，さらにもし堤があったにしても浅いことより防御施設ともなりえない。こうしてくると土器片の出土量の違いが，溝を境にしてみられることから集落の境界を示すもの，すなわち居住地域と非居住地域との境を示している可能性が強くなる。ただ，調査された範囲はほんの一部であって未調査部分がほとんどであるため結論を述べるには資料不足である。

さらにＡ溝状遺構より新しいＢ溝状遺構が台地末端を走り，その規模を大きくしているということは機能を居住地域と非居住地域との境界と考えれば居住地域の拡張につながる。眼下の小野川流域に営まれた水田耕作を基盤にした花熟里遺跡の住人が人口を増やし，その集落を発達させていった状態を物語っているといえよう。（文責　池畑）



花熟里遺跡平面図